

民 俗

風習・信仰・生活・伝承

<概説>

民俗(学)は、歴史や文化の変化する部分(表層)と急激に変化しない部分(基層)のうち、後者に属するいろいろな観点を探り出し、庶民(常民)の生活文化を明らかにする研究分野です。その内容は、毎年定期的に繰り返される行事(年中行事)・人の誕生から死後までの儀礼(人生儀礼)・その背景となる生業(農業や商業)や社会組織・宗教(信仰)・衣食住などです。また、近年は生活基盤の場である土地と、その民俗景観も重視されています。

市域が位置する民俗景観は、東に利根川、西は江戸川によって他地域と分断され、しかも南側も明治中期に開削された利根運河によって分断されました。まさしくギリシア文字のデルタに相似した孤立的地形が特徴的です。

地勢的には、下総台地(しもうさだいち)と低湿地で、その高低差は小さいのですが、台地の縁が鋸(のこぎり)の歯(鋸歯きょし)状で、鋸歯の一部は台地の奥深くまで溺れ谷(おぼれだに)を形成しています。この谷は谷津(やつ)と呼ばれ、稲作の場(谷津田やつだ)として展開されました。

台地の土地利用は、斜面の南側とその台地上で畑作が展開されました。そして、台地中央部(分水嶺ぶんすいれい)を縫うように南北に走っているのが日光東往還(にっこうひがしおうかん)で、江戸時代には山崎宿と中里宿が設けられ、江戸と関宿城下へ通じる重要道でした。この往還の左右から渡船場や河岸場(荷物を舟に積み込む場所)へ通じる主要路、村々を結ぶ生活路が発達しました。

この民俗景観は、結果的に舟運(しゅううん)等の河川流通網の活用で醤油醸造業が成立し、後背地に農村(原料供給)を有する地場産業都市を出現させたのです。

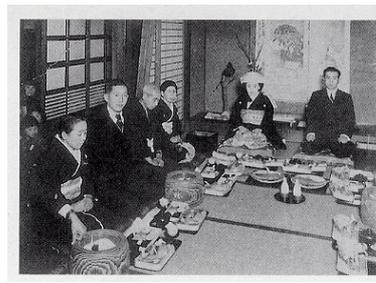
しかし、景観にも負の部分がありました。戦前までは続発した洪水被害、恒常的に低湿地に出現した逃げ道のない水(湛水たんすい)の処理の問題です。このため田畑の作物が水腐れしたのです。なかでも収穫間近で倒伏した稲は、「稲が萌える」(発芽する)という始末で、3年に1度は痛い目にあつたと伝承されています。また、水害から財産を守る方法として人びとは、自然堤防上や土盛りしたその上に住居を構え、軒先に船を備える水塚(みづか)と呼ばれる住空間を有したのです。

そして、湛水問題解決に尽力したのが関宿藩士の船橋随庵(ふなばしずいあん)で、城下の湛水を20数キロ下流の利根川へ導きました。これを関宿落堀(せきやどおとしぼり)と称し、現在も使用しています。

このような民俗景観を背景に、生き抜いた人びとの民俗を探るため、現在調査を継続しています。



村落社会



家族・親族



生業



交通・交易



衣食



住まい



人生儀礼



年中行事



民間信仰



口承文芸